

氏名(本籍)	吉野 淳一 (北海道)
専攻分野の名称	博士 (社会福祉学)
学位記番号	博第1号 (乙第1号)
学位授与の日付	平成24年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学位論文題目	ナラティブ・アプローチをもちいた自死遺族の自死者との対話的 関係の再構築に関する研究 —新たな喪の作業の支援にむけて
論文審査委員	主査 北星学園大学教授 米本 秀仁 副査 北星学園大学教授 水川 喜文 副査 北星学園大学教授 田澤 安弘 委員長 北星学園大学教授 杉岡 直人

学位論文審査要旨

吉野淳一氏(以下著者と記す)の学位論文「ナラティブ・アプローチをもちいた自死遺族の自死者との対話的関係の再構築に関する研究—新たな喪の作業の支援にむけて」の特徴は、以下のように言うことができる。1998年以来、わが国の自殺死亡者(自死者)が3万人を超え続けているという社会的背景を踏まえると、その自死者の何倍もの自死遺族が悲しみと理解に苦しむ現状があることになるが、その成員を自死で亡くして遺された家族は、生者とだけではなく「死者とも共に生きている」という独特の喪の作業を明らかにすること、その喪の作業のために「死者のいない現実に適応するのではなく、自死者との対話的な関係が維持されていることに気づき大切にしていけるよう自死遺族とともに取り組む」ことの重要性とその実践の成果を「介入研究」として明らかにすること、本論文はこのような目的をもった独創的な実践の研究成果である。またこの研究成果は、著者が折に触れて査読付学術雑誌(家族療法研究、トランスパーソナル心理学/精神医学、集団精神療法等)に投稿し採用・掲載された諸論文の加筆改変も含まれており、これまでの著者の研究成果の質の高さを窺わせるものである。

一 本論文の構成

本論文は、以下のように構成されている。

目次

序章

第1節 研究の背景

第2節 本研究の目的と意義、用語の定義

第1章：自死と自死遺族支援研究の推移

- 第1節 自死について
- 第2節 自死遺族の受ける心理社会的影響について
- 第3節 自死遺族の喪の作業への支援について
- 第2章：困難な喪の作業に直面する自死遺族への支援のための方法論
 - 第1節 相談現場における疑問
 - 第2節 社会構成主義が喪の作業への支援にもたらす視点と地平
 - 第3節 本研究の各主題間の相互関係
 - 第4節 困難な喪の作業へのナラティブ・アプローチ
 - 第5節 倫理的配慮
- 第3章：自死遺族の経験世界
 - 第1節 自死遺族の経験世界をどう把握するか
 - 第2節 語りのはじまり
 - 第3節 成員を自死で亡くした家族のそれぞれの語り
 - 第4節 自死遺族の思いを語る集い（癒しの会）の経過
 - 第5節 受け入れがたい事実を受け入れるための物語生成
 - －自死遺族の思いを語る集いにおける自らを納得させようとするストーリーの萌芽抽出－
 - 第6節 癒しの会を持つ意味
- 第4章：この世とあの世をつなぐ者（シャーマンの教え）
 - 第1節 なぜシャーマンか
 - 第2節 対象者の選定と研究の方法
 - 第3節 シャーマンと私の出会い
 - 第4節 シャーマンか否か
 - 第5節 シャーマンの語る行為と語られた内容の分析
 - 第6節 自死遺族とシャーマンの出会い
 - 第7節 シャーマンと癒し
- 第5章：自死遺族の夢の中での死者との再会
 - 第1節 夢という再会の空間
 - 第2節 夢を記録し語ることの奨励
 - 第3節 死者との関係を取り戻す質問
 - 第4節 自死者の登場する夢に関する語りと質問への回答
 - 第5節 夢について語る構造と夢の中での自死者との対話
- 第6章：総合考察
 - 第1節 本研究の3つの主題間の関連
 - 第2節 本研修の3つの主題間の共通性と差異
 - 第3節 本研究における3つの主題はナラティブ・アプローチたりえたか
 - 第4節 総合考察のまとめ
- 終章

第1節 喪の作業の両輪の存在とそれを機能させる各主題

第2節 自死遺族の喪の作業への支援はどうあるべきか

第3節 本研究の実践的意義

第4節 結語

注・文献

文献一覧

二 本論文の概要

序章：

本章では、わが国の自殺死亡者（自死者）が1998年以来3万人を超え続けている文脈の中での自死遺族の存在に目を向け、その自死遺族の喪の作業の特殊性は従来の「死者を亡き者としてお別れをし、目の前の現実に適応する」という喪の作業では収納しきれない地平の広がりがあることを指摘し、予備的に自死遺族の独特の経験と苦悩を描き出し、遺族と自死者との対話的關係を重視する立場を打ち出す必要性を導入する。このような導入の後に本研究の目的（これまでのアプローチとは異なる、死者との対話的關係を再構築しようとする社会構成主義に基づくナラティブ・アプローチが、自死遺族の喪の作業にどのような貢献をなしうるかを明らかにすること）と意義（伝統的な喪の作業とは質の違うアプローチが自死遺族の喪の作業の進展や新たな方向性を示すことができれば、関係の一方的な断絶を経験させられた自死遺族の困難な喪の作業における支援の一つの形を示すことができる）を記述し、そして、とりわけ本論文で使用される用語に関して綿密な定義を行った。

第1章：自死と自死遺族支援研究の推移

本章は、自死と自死遺族支援研究の推移に関する先行研究レビューであり、先ず歴史的に見れば、自死は犯罪視、タブー視、懲罰の対象、スティグマ化等の結果、自死遺族に対しても罰則が適用されていたと纏められる。また、自死遺族の心理についての文献がレビューされ、恥辱感、恐れ、拒絶された感じ、怒り、罪責感（自責）等が共通に指摘されること、更に、自死と他の死因による死別体験の比較によれば、量的研究においては両者の悲嘆に殆ど差がないとされるが（しかし、中には他の死因よりも精神的に衝撃が大きく永続的であるとの結果を見出しているものもある）、質的研究の必要性があることを主張されていること、また自死遺族の悲嘆の特殊性を訴える根拠として、①遺族はしばしば自死者の真意と気持ちを理解するのに苦しむ、②自死遺族は自殺行動を予期したり阻止したりできなかったことへの高いレベルの罪責感・自責・自死者への責任といった感情を示す、③故人への怒りを持ちながら愛する人によって拒絶されるかもしくは見捨てられるといった強い感情を経験している、といった事柄が指摘されていると述べる。

このように自死遺族の死別体験・悲嘆の構造が他の死因による遺族の者とは異なる（可能性がある）との前提で、自死遺族の喪の作業には特別のケアが必要であることの可能性を探る。そこでの核は、遺族が（他の死因による死別とは異なる体験をしているのに）自

らの悲しみを捨て去ることを専門家から強いられているように感じ、専門家のグリーフケアを要しないと主張する自死遺族もいるように、遺族なりの意味付けや解釈を大事にする対応が大切であることの可能性をいう。そしてこのような特殊性がある自死遺族の喪の作業へのこれまでの対応（援助）あり方について、特にこの支援に携わる専門職の負担を軽減する必要性が高まっていること、行政による遺族支援は困難を感じていること（それ故に行政は自死遺族支援に二の足を踏んでいること）、自助グループにしても立ち直りを促進する側面と妨げる側面の両面を持ち合わせている可能性があること、そのような中で、遺族の辛さを正当に認めてくれる人に出会うこと・同じ立場の人の存在を知ること・同じ体験をしてきた遺族だけで「分かち合う」自助グループという集いがあること等を、自死遺族が訴える事実を明らかにした報告があることを著者はいう。

これらの文献概観の後に著者は、①自死者のみならずその遺族も現実生活の中で非常に肩身の狭い思いをさせられてきたこと、②他の死因による遺族の悲嘆と自死遺族の悲嘆に差があるかの研究で量的研究では有意差があるとは言えないとする報告が多い中で、当の研究者が質的研究の必要性を訴えるなど、今後の多彩な質的研究の積み上げが待たれていることが明らかとなった、③何らかの質的な差異があると想定したときに、特別なケアが必要なのかについて、伝統的な悲哀過程の規範的理論が自死遺族の心情に適合せず、新たな悲哀の仕事が望まれるようになってきていることが明らかとなった、と纏めている。ここから、著者の採る「ナラティブ・アプローチという介入方法」へと論を進めることになる。

第2章：困難な喪の作業に直面する自死遺族への支援のための方法論

本章では、著者のこれまでの相談援助現場における援助者とクライアントの段差（相談を進めるために生まれた構造や仕組みに起因する権力構造）への違和感から出発し、家族療法における「リフレクティング・チーム」との出会い、研究の思考における「論理科学的モードと物語的モード」という区分との出会い、そして社会構成主義という大きな思想的潮流との出会いが語られ、この社会的構成主義をメタ理論とするナラティブ・アプローチ（それは、先の段差＝権力構造を批判する著者からすれば、ナラティブ・セラピーではないこと）を採用することが示唆される。

更に、このアプローチを使用する対象に関する悲哀理論の推移を検討する。これまでの悲哀理論として、フロイドの「悲哀とメランコリー」論、リンデマンの「急性悲嘆反応」論、小此木の「対象喪失」論、ウォーデンの「グリーフワーク」論、キューブラー—ロスの「死の受容過程」論等が取り上げられ検討される。しかしこれらはいずれも、最終的には「死者を忘れ、死者のいない世界に適応するための理論」である。これに対してポストモダンの潮流の中での理論には、ナラティブ・セラピーからの貢献として「再会メタファー」と「リ・メンバリング」概念が際立ったものであると著者は言う。これらはいずれも、悲嘆を終結させ、故人のいない生活への適応がゴールとされるモダニストのドミナントなアプローチに疑問を投げかけるものであり、その後の理論家の見解をも含ませれば、結局「遺されたものと死者との間できずなを結ぶことは、関係によって築かれる現実を構築することであり、それは同時に経験主義という現実とは違うオルタナティブな選択であり、

当事者たちの物語的真実として意味づけられる」ものであるとして、このことから社会構成主義の視点と地平への検討へと入る。ガーゲンの理論、西條からの批判を検討し、著者は社会構成主義を採用する理由として、①喪の作業は極めて個別性の強い仕事であり、標準化や客観性や本質論にはなじまない、②遺族を救うのは、現実には縛られないイマジネーションや自ら創造したストーリーに負うところが大きく、それはひとつの現実を構成していくプロセスである、③自死遺族が自死者・遺族同士・支援者とのあいだで対話的關係を持つ営みを、言葉が現実を構成する、意味は関係から与えられるとすることで現実的な意味ある作業として奨励する根拠が得られる、④孤独な内的対話による独善的な意味付与ではなく、関係の中で共有可能な意味を創出しようと動機づける根拠となる、と纏めている。なお、質的研究における他の方法との比較は別途節を変えて行われている。

このような研究方法論の選択過程に続いて、著者の研究論文の全体構成が示される。著者の研究は「介入研究」であるから、対象者（自死遺族）への実践的支援過程が研究データを提供してくれるものとなり、その実践の場として「癒しの会（自死遺族の思いを語る集い）」「シャーマンの教え」「夢の中での死者との再会」の3つ（の主題）が提示され、その場と研究者の関連図が示される（図4）。続いて、ナラティブ・アプローチの適用と分析方法が示される。著者は「本研究でいうナラティブ・アプローチは、語るという行為と語られた内容(物語)を題材に自死遺族の喪の作業の促進という特別な意図をもって接近し、交渉をし、賛同してくれた自死遺族とともに語る行為と物語生成という作業に共同で取り組む一連のプロセスを指す」と規定している。そしてこのアプローチの特徴として3つの主題に共通に「三角形図式の持ち込み」があるとする。基本は自死者と自死遺族との対話的關係に実践者（研究者としての私）が第3項として関係し、三角形を作ることになるのであるが、これによって、自死遺族は①新たな視点を獲得し、②距離（迂回路）が発生することで冷静に考えるに必要な距離を保つことができ、③三角形による面の発生によって対話空間が生まれる、という効果が生み出されると著者はいう。

第3章：自死遺族の経験世界

ここでは、自死遺族の経験世界を把握するための基本的な姿勢、つまり「教えてもらう」（宮本常一の民俗学の方法）に習い、これがナラティブ・アプローチの「無知の姿勢」とピッタリ重なり合うことを確認して進めている。自死遺族の様々な語りのエピソードを紹介し、そこにある「同じ痛みを持つ好意的な聴衆の前で語る」ことの必要性・有用性の足がかりを得ている。そこから、自死遺族の思いを語る集い（癒しの会）の組織的研究へと移るが、この癒しの会の経過を導入期（第1～6回）、確立期（第7～9回）、半開放期（第10～17回）、試行錯誤期（第18回以降）に区分し、その間の会のルールの変化、各期の課題、参加者との葛藤、研究者としての著者と参加者との葛藤、等が整理されているが、この叙述自体が組織のダイナミズムを語っていることで興味深い。

本論文において自死遺族の経験世界をナラティブ・アプローチによって解明するために、録音によって逐語録を採ることができた第7回から第16回のテキストを素材として分析している。分析方法は、鈴木（2006）の物語主題の分析法を参考にして、①物語をパラグラフ単に分解する、②それぞれを要約する、③要約文をさらに要約し少数のキーワードに変

える、④これまでの還元作業によってコーディング・カテゴリーを作成する、⑤共通性を検討してカテゴリー・セットにまとめる、の順序で行っている。この手順によって、自死遺族が自らの痛みを納得させるストーリーの萌芽を抽出するのであるが、その際の着目点は、「発言に至る文脈や発言中の「いつも・・・」とか「結局・・・」「・・・思うようにしている」「最近・・・」などから参加者個人でこれまで繰り返し吟味されてきたと思われる言い回し、自らを納得させようとする意向が感じ取れるといった点において他との差異のある語り口やエピソードに着目した。また、同時にその言い回しや語り口やエピソードが発せられる前後の参加者間のやりとり（相互作用）にも注意を向け」というものである（図8）。

結果として、表23に示す合計21の萌芽が抽出され、4つのカテゴリー・セットにまとめられた。即ち、①ゆるすこと（萌芽：1・2・6・7・8・9・11）、②超越的な力の働き（萌芽：4・10・13・14・18・19・20）、③尊厳と絆の回復（萌芽：5・12・15・16・17）、④不可抗力（萌芽：3・21）の4つである。これらのストーリーの萌芽を眺めると、殆どは自死がなぜ起きたのかを説明しようとするものになっていることが分かり、この説明とは自死遺族が自らを納得させようとして自己説得的に発せられたものである。また、4つのカテゴリーは、現場の言葉を理論の言葉に移し変えていくことによって得られたものであるが、この言葉を再び現場に還元するために、山崎（1999）の解説を参照しつつ、自死遺族の喪の作業の指針として「認め—あきらめ—とりもどし—つながる」と表現された。しかし、ストーリーの萌芽は、自死遺族を苦しめる後悔や自責の念といった否定的な感情を解消してくれるわけではなく、底流に常に存在する。このダイナミズムを表現したものが図20の納得の構図である。このように、「癒しの会」では、水平の関係における対話的關係によって自死遺族の納得（実は最終的に解決することはない）の構図が明らかにされたのである。

第4章 この世とあの世をつなぐ者（シャーマンの教え）

古来シャーマンは死者や神（の使い）などの不可視の存在と対話的な関係を持ち、その対話的な関係からの教えを地域社会に住まう衆生に伝える役割をもっていることから、研究者である私と研究を通して対話的な関係を持ち、そこでシャーマンが知るであろう自死者の行く末や遺族の癒される可能性に関する見解を知ること、また、自死遺族自身が苦悩からの解放のあらゆる可能性を求めるとして超越的な観点からの展望や助言を求めるとことから、このシャーマンとの出会いによって「対話的な空間を創造し、対話的な過程を促進させる」ことが自死遺族の支援に役立つと考えられる。いわば垂直の関係による対話的關係の促進である。

このために、4名のシャーマン（もしくは特異能力者）にインタビューを申し込み、承諾を得て、「その世界観と自死に関する見方を抽出し、自死遺族の癒しの可能性を考察すること」を目的として、著者とシャーマンのインタビューデータを物語分析によって分析した。その結果、シャーマンは自死の原因を見定めようとして因縁仮説を生みだし、解決策として供養が発案されるが、他方宗教的形態を背景にしないシャーマンには生理・生物学的要因もしくは物理学的（エネルギー的）要因を重視する見方や宇宙観に支えられた見解

が見られた。

この予備的作業によって、著者は「自死者当人だけに過大な問題を負わせることはなく、共感的に自死者を見ることを可能にする文脈を持ち合わせているとみなすことができ、自死遺族に紹介することが可能な見解であると思われる」と結論を出し、実際に2名の自死遺族の希望に沿った紹介を、シャーマンとの適合性を考えて行った。その結果、一人は、満足しなかったものの手を尽くし自分で解決する必要性が分かったこと自体を収穫とし、もう一人はシャーマンならではの超越的な力で心配が無用であることが分かり、安心して楽になっていた。しかし、シャーマンの超越的な力をもとにした垂直的な関係を持ちこむことは、自死遺族の精神的な安寧に寄与することができる可能性があるものの、苦悩を解消し喪の作業の完了をもたらすわけではないことも明らかにされている。

第5章 自死遺族の夢の中での死者との再会

「死んでからの方が、ずっとあの人のことを考えています」という多くの自死遺族の言葉は、自死遺族が自死者と対話している時間、思いを馳せている時間が、生前よりも亡くなってからの方がずっと濃厚であることを意味する。関係は死後も続くし、亡くなってからの方が濃くなることもあるということである。社会構成主義を基盤とする悲哀へのアプローチに現れてきている「再会メタファー」「リ・メンバリング」といった概念に触発されて、もっと自死者と自死遺族の再会やリ・メンバリングを印象付ける方法を施策する中で、「夢」という出会いの空間が着想された。ここでの研究目的は「夢を死者と再会可能な空間として遺族とともに再構成し、その再会を通じて遺族が自死者を対話的な関係を取り戻すことが、終わりのない“なぜ”や怒りや恥などの複雑な諸感情に苦悩する自死遺族に自死者との対話的な関係を再構築する機会をもたらす得るのかを明らかにする」ことである。

研究協力者となった5名の遺族に対して、夢を記録し語ることを奨励する方法であるが、その際、夢の記録の報告の後に表41にある質問紙を送り回答を求めた。この質問は、どのような夢を見ましたかという報告を求めることとは異なり、関係として報告すること、関係として夢を見よ、関係をつくる方向で夢を見よ、見られた夢を関係という側面から解釈せよ、ということを求めるものである。これによって、夢の中での死者との再会は、単なる一偶然の産物ではなく、自死者と自死遺族の対話的な関係の再構築の端緒となる。

その結果、夢の中での死者との再会がもたらすものとして、①自死者の視点を入れる(視線移動)、②関係を継続させる、③疑問をぶつける、が見出されている。勿論、夢であることによる限界はある。夢を見る人と見ない人がいること、過剰に夢での再会に傾注する場合も考えられること、夢の内容を夢見手はコントロールできないことなどであるが、結論として、「自死者との言語的対話は成立しているとは言い難く、死者になぜと問うても、明確にその理由が述べられることはなかった。しかし遺族は、夢の中で自死者のようすから言葉を越えたメッセージを汲みとったり、求めても得られない限界を察したりしていた。すべてが満たされる体験をしているわけではないものの、自らの思いを伝えられたらと仮定する質問には自死者からの肯定的な反応を想像できた例が多かった」のであり、夢を死者との再会可能な空間として遺族とともに再構成する可能性があることが示唆されたと言い得ると著者は述べる。

第6章 総合考察

総合考察では、本研究の3つの主題であり研究フィールドでもある「自死遺族の思いを語る集い（癒しの会）」「シャーマンの教え」「自死遺族の夢の中でも自死者との再会」の、主題間の関連が考察された。①抽出された納得のストーリーの萌芽の4カテゴリーとシャーマンの教えを照らし合わせると、4つのカテゴリーに対応する考え方をシャーマンが有していることが見えること、②癒しの会と夢の関連では、納得させようとするストーリーの萌芽を、夢の中で自死者を前にして当の本人に直接に確かめる機会を得ることができること、③シャーマンと夢の関連では、双方とも変性意識状態でつながっていること、等の関連を見ることができた。

次いで、3つの主題間の共通性と差異を考察している。方法論的な共通性として、①社会構成主義をメタ理論とするナラティブ・アプローチにおいて共通し、これが自死遺族と自死者との間に対話的關係が再構築される機会をもたらした、②本研究が介入研究であることから当然に三角形図式を共通に持ちこむことによって、視点・距離・空間を得ることができた、③これらの関係において共通に「教えてもらう（無知のアプローチ）」姿勢を取ることによって、対象への接近と語りが可能となった。他方で、3主題における自死遺族の関係のあり方は、癒しの会においては水平の関係、シャーマンにおいては垂直の関係、夢での再会は直接の関係という関係様式の差異が見出されている。

更に、内容的な共通性と差異として、先ず3つの主題を貫いてそこにある内容は「納得の構図」であり、図29（ナラティブ・アプローチの自死遺族の抱える荷の意味を変質させようとする過程）に示されているが、それは、誰も家族成員の自死に伴い発生する苦悩を解決することはできず、そのまま一人で生きるには余りに重すぎるとするならば、少なくとも同じ境遇の人同士で語ることで自死者との絆を確かめ、夢の中での再会で自死者との対話的な関係を維持し、必要であれば垂直方向の進言をもらうなどして、重荷を少しでも軽くして（時にはその荷の意味を変質させることによって）自死者との関係を胸に携えて生きていこうとする構造として説明された。

最後に本研究の3つの主題に共通する方法がナラティブ・アプローチでありえたかの考察ののちに、著者は、研究者である私と研究協力者である自死遺族の間の対話的な関係を構築し、ナラティブを共同生成することによって、最終的に自死遺族と自死者との対話的な関係を再構築するに至り、それまでの成員の自死による抱えるには重すぎる荷を、自死遺族が携えて生きられるようにその意味を変質させることに貢献できたと考えたと結んでいる。

終章

著者は、自死遺族があこの世の自死で無くなった成員を思いながら、この世で我々と共に生きている存在であることに着目し、自死遺族の喪の作業をすすめるには、この両輪を視野に入れて支援しなければならないとして、本研究がこれまで顧みられることのなかった両輪を機能させるために積極的に自死遺族の自死者を思う作業を奨励した研究であることを強調する。これまでのカウンセリングや自助グループ、サポートグループが捕らえそこなっていたこの両輪について、肝心なことはその体験を語れることであるとしてナラティ

グを喪の作業においた実践と研究を集大成したのである。

しかし著者は、この研究で得られた知見はあくまでもローカルな知であることを自覚しつつ、しかしそこから今後の自死遺族支援において有効に活用できる可能性があるとして、以下の手法を普遍化するための示唆を行っている。即ち、①教えてもらう、②三角形をつくる、③3つの主題における三角形の位置関係、④癒しの会における手法あるいは姿勢、⑤シャーマンの教えに関する手法または姿勢、⑥夢の中での死者との再会における手法または姿勢、の6点であり、これらの般化可能性があるならば、あらゆる治療理論が沈黙する事態を打ち破る可能性を秘めるものとしている。

最後に著者は、今後の課題として、例えば「あの子はなぜ死ななければならなかったのでしょうか」「どういう意味で私にこの経験がひつようなのでしょうか」といった「難問」が多く聞かれるようになったことを指摘し、これは自死遺族の素朴な疑問が宗教的、哲学的な領域に入り込んできていることを示すものであると捉え、他の治療理論が沈黙するこの状況から援助者が立て直していくための有力な候補として社会構成主義を後ろ盾とするナラティブ・アプローチの可能性を探ることを示した。

三 本論文の評価

以上に要約された吉野淳一氏の学位論文は、審査委員会として以下の点について高く評価しうるものとした。

1. 「自死遺族は特別か」という疑問への一定の回答を与えていること

自死遺族への支援のあり方を検討する場合に、自死遺族は他の死因による遺族と比較して特別の特性を持つのかという疑問に応えなければならないが、本研究は、綿密な先行研究レビューによって、量的研究では双方に有意な差はないという結果を報告するものが多いが（中には有りとする研究もある）、それでも質的研究で探求する必要があるという見解が多いという結果を発見している。同時に、これまでの記述的あるいは臨床的研究においては、「自死遺族の悲嘆の構造と特性」が報告されており、ここでは共通に、恥の概念・後悔・自責の念等があると報告されていることを見出している。これに関連して、自死遺族へ特別の支援が必要なのかに関して、伝統的な喪の作業とされるものとの対比をしているが、それによれば、伝統的な喪の作業は「死者を殺すこと（死者がここにはいないことを認め、そのいない世界へ適応すること）」であるのに対して、意思遺族の喪の作業は自死者が何故に自死に至ったのかに関する終わりのない「何故」という問いに苛まれながらの喪の作業であることを明らかにした。従って、自死遺族支援へのこれまでのアプローチ（伝統的な適応支援のアプローチ）の限界として、カウンセリング等の個別支援でのセラピー対象者化に対する当事者からの批判、グリーフワークにおいても、また自助グループや行政においても自死遺族への支援に二の足を踏むという事態があることが明らかにされている。また行政における「自殺予防の推進という言説」自体が、自死遺族に対しては「自殺予防に失敗した者」という新たなスティグマを押し付ける危険性があることも指摘されている。こ

のような検討を経て、自死遺族には当事者同士の語り合いによる共有が求められていることも明らかにされ、これが研究の可能性を裏打ちしていることが示された。

2. 研究方法の綿密な検討に基づくものであること

本研究は著者自らの実践に基づくデータによって組み立てられた「介入研究」である。その介入の目的は、上記の自死遺族同士の、遺族の語りを「真面目に聞いてくれる人」との、そして遺族と自死者との対話的關係を構築することである。その実践の成果を研究成果としてまとめ上げるためには、①で示した独特の対象世界への介入の様相を質的に解明することが相応しいと判断している（論理科学的思考モードに対する物語的思考モードの採用）。この判断に基づいて、その質的研究がどのような特性をもつものであるか、その質的研究の中でもどのような具体的アプローチを採用するのかについても綿密な検討が展開された。

そこで採用されたのが、メタ論理としての社会構成主義に基づいた、ナラティブ・アプローチである。これもまた、ナラティブ・セラピーとの違いの検討、質的研究の他の諸方法との比較検討での棄却等の手続きを経て、ナラティブ・アプローチの採用が説明された。

自死遺族の対話的關係の二重・三重の性格に対する介入は、三角形図式によって統一的に説明された。つまり、この三角形の形成によって自死遺族は、新たな視点の獲得、迂回路を経ることによる距離の獲得、対話的空間の獲得が可能となるという説明であった。そして、介入の手法として、三つの対象フィールド共通に、対話の構築・促進のために対象者から「教えてもらう」という手法が採用された。これらの一貫性を持った研修手法の採用と展開は確かに評価に値する。

3. 癒しの会・シャーマン・夢という独創的な3つの研究フィールドとその介入成果

この3つの独創的な実践・研究フィールドは、必ずしも実践の当初からの構想にあったものではなく、いわば実践の流れにおいて考案されてきたものである。しかし、研究成果として客観化してみると、以下のような特徴が描き出される。

即ち、自死遺族同士の語り合いの場である「癒しの会」は、同士間の水平な関係であり、そこでの研究者はファシリテーターの役割を担っている。「シャーマンの語り」の場は、自死遺族が権威による説明を望む垂直の関係であり、ここで研究者は媒介者の役割を担っている。そして「夢での再会」のフィールドは自死遺族と自死者との直接の関係であり、そこで研究者はこの関係を構造化する指示的役割を担っている。つまり、ここでは、自死遺族が3つの様相において対話的關係を構築するといっても、水平関係・垂直関係・直接関係の様相が明らかにされたのであり、且つこれら3つの場の構成は、右に行くほど介入的に構造化されているということである。更には、自死遺族は「癒しの会」では語る主体として、「シャーマンの語り」では語られる受動態として、そして「夢での再会」は発現の偶然性に規定されるという（その分、自死遺族の自由度は、大・中・小となる）構造が見えてくる。

こういった研究方法・フィールドの設定の結果として産み出された成果は、以下のような特徴を持ったものであった。

- ① 自死遺族同士の「癒しの会」の水平関係において著者がファシリテーターとして関わる中で、全10回の会の逐語録の分析によって、「癒しの会」における対話的關係により、自死遺族の経験世界に納得のストーリーを生成しようとする試みが重ねられ、納得のストーリーの萌芽(21概念・4カテゴリー)が見出された。この抽出過程は、水平関係における相互の質問や自己開示などの促し(誘い出し)⇒聴衆への披露⇒同意や言い換えによる受けとめ・分かち合い・否定の動きのある語りの連鎖を基準に行われ、物語主題の分析手法(鈴木2006)によって生成を行った。その生成された4カテゴリー【1)ゆるすこと 2)超越的な力の働き 3)尊厳と絆の回復 4)不可抗力】とそれらのカテゴリーを自死遺族の心的作用に翻訳された4概念【認め—あきらめ—とりもどし—つながる】との関係を示し、そしてこのような一見回復・癒しに向かうように見える喪の作業においても常にその底流にある否定的感情【「許」を巡る葛藤】を組み合わせたダイナミズムを「納得の構図(図20)」として示した。

この自死遺族の語りは、正に家族内では語れないこと・話されないこと(つまり話すことで原因探し、責任探しに終始して家庭を維持できなくなる可能性があること)を自由に水平的に語る場が与えられたことによって可能となったことも指摘された。

これらの結果は正に斬新な結果と評しうるものである。

- ② シャーマンの語りの世界においては、一見すると異質な感じがする主題であるが、自死遺族は、その「永遠の何故」疑問に対して時には何らかの「権威」による垂直の関係での説明を希求する(例えば、真実を知りたい)。宗教への接近もその一形態である。著者はそのような自死遺族の心情への対応の可能性を「シャーマン」に求めた。単に紹介する・媒介する役割ではなく、著者自身がそのシャーマンの世界がどのようなものであるか、自死についてどのような見解をもっているか、自死遺族に紹介するに信頼できる人物であるかを正に慎重に確認するために、4名のシャーマンにインタビューを行った。その結果を先の物語分析の手法によって分析し、シャーマンは、自死について自死者本人の責任を問うのではなく、先祖からの因縁仮説、あるいは生理生物学的・物理学的まなざしでいわば「外在化」する見解を明らかにした。そこからシャーマンによって、自死遺族の安寧は、供養すること、どうにもならないことがあることを知ること等による見解が示されたが、著者は「自死者本人だけに過大な問題を負わせることはなく、共感的に自死者を見ることを可能にする文脈を持ち合わせているとみなすことができ、自死遺族に紹介することが可能な見解であると思われる」と結論を出している。

著者の実践は、2名の自死遺族への紹介を、適合性を考えて行っているが、その結果は、1名は「解決しなかった、しかしシャーマンと出会うことで自分で解決しなければならないことが分かった、会わなければいつまでも会わなければと思いつつ続けたであろう」と言い、もう一名は(娘の困難も絡んでいた)「出会うことで、

気持ちがフッと開いて、聞いてよかった、怖いものがなくなって家の中が落ち着いた、しかし誰にでも勧めるとは言えない、ケースバイケースだろう」と言う。

- ③ 夢における構造的物語生成： 取り残された自死遺族は、永遠の何故に答えるために、自死者に問いかけたいと思う。最近の悲哀へのアプローチにおいてリ・メンバリングや再会メタファーを用いられていることから、更に鮮明に印象付ける方法を探る中で着想されたのが「夢という出会いの空間」である。著者は「自死遺族に自死者の登場する夢の書き留めを依頼し、報告された夢に対し質問し（構造化された5項目）回答をもらうという往復を通して、自死遺族と共同で自死者との対話的關係の再構築作業を行った」。いわば「何故」に対して現在進行形で続くことを可能にするための問いかけであり、夢における自死遺族と自死者との直接的關係の構築である。この試みへの賛同者を募りながら協力を得た5名の自死遺族からの夢の報告には1週間から1年、質問への回答には即日から半年をかけたものである。この質問（表41）は、どのような夢を見ましたかという報告とは異なり、關係として報告すること、關係として夢を見よ、關係をつくる方向で夢を見よ、見られた夢を關係という側面から解釈せよ、と求めるものである。これによって、夢の中での死者との再会は、単なる一偶然の産物ではなく、自死者と自死遺族の対話的關係の再構築の端緒となる。

その結果、夢の中での死者との再会がもたらすものとして、①自死者の視点を入れる（視線移動）、②關係を継続させる、③疑問をぶつける、が見出されている。勿論、夢であることによる限界はある。夢を見る人と見ない人がいること、過剰に夢での再会に傾注する場合も考えられること、夢の内容を夢見手はコントロールできないことなどであるが、研究者としての著者と自死遺族が共同して喪の作業に取り組むことを可能にする格好の素材である「夢」による研究成果を、著者は「自死者との言語的対話は成立しているとは言い難く、死者になぜと問うても、明確にその理由が述べられることはなかった。しかし遺族は、夢の中で自死者のようすから言葉を越えたメッセージを組みとったり、求めても得られない限界を察したりしていた。すべてが満たされる体験をしているわけではないものの、自らの思いを伝えられたらと仮定する質問には自死者からの肯定的な反応を想像できた例が多かった」と述べ、夢を死者との再会可能な空間として遺族とともに再構成する可能性があることが示唆されたと述べる。

4. 結論として何が明らかになったか

以上のような特徴を持った本論文は、結論として図29（ナラティブ・アプローチの自死遺族の抱える荷の意味を変質させようとする過程）で全体構図が示された。端的に言えば、自死遺族の苦悩は解消しなくとも自死者との絆を回復し、対話的關係が維持されていることに気づく段階まで進むことができるということであるが、著者は「家族成員の自死を経験した遺族が、その身内の自死といった問題を抱えて生きるのではなく携えて生きていけるようにする」ためのものが「納得の構図」であるという。即ち、「誰も家族成員の自死に伴い発生する苦悩を解決することはできない。しかし、

そのまま一人で抱えて生きるのにはあまりにもこの苦悩は重すぎる。そうであれば、少なくとも同じ境遇の人同志で語ることで死者との絆を確かめ、夢の中での再会で自死者との対話的關係を維持し、必要であれば垂直方向の進言をもらうなどしながら重荷を少しでも軽くして自死者との關係を胸に携えて生きていく」ということが可能であることをこの介入研究が明らかにしたのである。

以上、本論文は、○研究主題の理論的・実践的意味・意義づけの斬新さ、○独創的研究(実践)フィールドの設定、○これまでの実践活動および研究成果の集大成としての位置(学術誌での掲載を含む)、○研究方法の入念な精査、本文に示されている豊かな素材、○自死遺族の「喪の作業の世界」とのそのダイナミズムを描き出したこと、○加えて「癒しの会」それ自体の組織的あり方の変容(導入期・確立期・半開放期・試行錯誤期の四期に区分)に見られる自死遺族の心的・關係的世界、○著者の個人的実践(介入)に留まらない普及の可能性とその条件の明示等において、学位博士を授与するに相応しい高い質を有しているものと審査員全員によって認められた。

以上のように、審査会において高い評価を得て、審査員全員が申請者に学位博士を授与することに合意をしたわけであるが、課題として以下の点が指摘された。

1. 第3章において「自死遺族の経験世界」が解明され、物語生成におけるストーリーの萌芽が抽出されたわけであるが、この「萌芽のカテゴリー化による4つのカテゴリー」と自死遺族の「心的作業の指針としての4つの概念」及びそれらとは独立に並行して存在する「自死遺族の否定的感情」の關係を図20「納得の構図」として表した。この図において、①第1カテゴリーとしての「ゆるすこと」が、他の3カテゴリーと抽象度において同一水準にあるかという問題、及び②否定的感情においても「ゆるすこと(許)」という用語が中核として使用されているが第1カテゴリーの「ゆるすこと」と整合するかという問題が論議された。
①の問題は、カテゴリー名が含まれる概念の抽象的描写であるか(他の3カテゴリー)、あるいは研究者の(機能的な)解釈が含まれたものであるか(第1カテゴリー)の違いであり、著者の再考の課題となった。
②の問題は、納得へのストーリー生成においてもそれは完結することはなく、常に底流には「許」を巡る葛藤(否定的感情)が存在し、納得の生成と不断に還流するという説明がなされたが、この還流の説明は了解できること、また、用語の整合性については①の問題に関する再考がなされるならば自動的に解決することが了解された。
2. 著者の独創的な介入研究の方法が、シャーマンや夢をも含むのであり、これらが著者の個人芸ではなく普遍的な介入方法として提示できるかがもう一つの問題であったが、著者の水平關係・垂直關係・直接關係という類型化によって、普遍化する道筋がつけられた。今後は、これらの介入方法の実効性を実証する実践展開が広められ、深められる必要があるだろう。

学位論文最終試験の結果の要旨

2012年1月17日、学位授与申請者吉野淳一氏の最終試験を行った。

試験において、提出論文「ナラティブ・アプローチをもちいた自死遺族の自死者との対話的關係の再構築に関する研究—新たな喪の作業の支援にむけて」に基づき、審査委員が疑問点に基づき逐一説明を求めたのに対し、吉野氏は、論文執筆後の知見も踏まえて、いずれも適切な説明を行い、審査委員の疑問を解消するとともに、今後の課題として指摘された事柄に関しても、それが課題であることに同意し、今後の研究への意欲を示した。